

《2018 年 4 月（通算260回）月例会報告》

「高校サッカー百年」をめぐって 一部活動のあり方を考えるー

中 塚 義 実

（筑波大学附属高校／NPO法人サロン2002理事長）

【日 時】2018 年 4 月 26 日（木）19：05～21：10（終了後は「景宜軒」～0：30 ごろ）

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室

【テーマ】高校サッカー百年をめぐって一部活動のあり方を考える

【演 者】中塚義実（筑波大学附属高校／『高校サッカー百年』編集委員／全国高体連活性化委員長）

【参加者（会員・メンバー）10 名】

岸卓巨（日本スポーツ振興センター）、北原由（都立武蔵高校）、小池靖（在ざいたま市／サッカースポーツ少年団コーチ）、小山基彰（ヒーローインタビュー）、斎藤芳（桜丘高校）、嶋崎雅規（国際武道大学）、竹中茂雄（東海道品川宿 FC）、中塚義実（筑波大学附属高校）、守屋俊秀（世田谷区サッカー協会）、吉原尊男

【参加者（未会員）4 名】

守屋佐栄、渡邊明志（ろう学校）、国島栄市、ほか 1 名

【報告書作成者】中塚義実

【本日の概要（目次）】

I. 「高校サッカー百年」を振り返って

1. 概 観

2. トピック

1) 前 史…日本へのサッカー伝来と東京高師の功績

2) 大戦前…学校中心の育成システムの確立／教育と競技の問題（野球統制令）／戦時体制下

3) 大戦後…新制高校と高体連の誕生／高校総体創設／テレビ放送と首都圏開催／J リーグ発足／

4) い ま…日本のスポーツ界をリードするサッカー界

ユースリーグ／U-18 フットサル／女子

部活動問題

II. 全国高体連サッカー専門部『高校サッカー百年』について

III. 全国高体連研究大会より一部活動としての「高校サッカー」のすがた

IV. ディスカッション

【本日の概要（配布資料より抜粋）】

I. 「高校サッカー百年」を振り返って

1. 前 史 … 日本へのサッカー伝来と東京高師の功績
2. 大戦前 … 学校中心の育成システムの確立／教育と競技の問題（野球統制令）／戦時体制下
 - 1) 初期（分立の時代）：1918 年～1925 年（大正 7 年～大正 14 年）
関西、関東、東海など各地に大会が分立していた。
 - 2) 中期（並立の時代）：1926 年～1933 年（大正 15 年～昭和 8 年）
大阪毎日新聞社（大毎）主催の大会が地域予選を始めたが、他の地域の大会も並立していた。
 - 3) 後期（統一の時代）：1934 年～1947 年（昭和 9 年～昭和 22 年）
中等学校選手権の全国大会として統一された。戦中の中断や戦後の債権の時期を含む
3. 大戦後 … 新制高校と高体連の誕生／高校総体創設／テレビ放送と首都圏開催／J リーグ発足
 - 1) 高校選手権のスタート
敗戦後の学制改革／新制中学の空白
 - 2) 高校総体開始と毎日新聞の撤退
高校総体の発足/苦戦の協会独自開催
 - 3) 民放参入と首都圏開催
民放テレビの全面的参画／テレビ局主導の開催地移転と観客急増／高体連の組織力とバブルアップ
 - 4) J リーグの発足とその影響
プロリーグの誕生／クラブ・ユースとの関係／学校スポーツの課題
4. い ま … 日本のスポーツ界をリードするサッカー界 → 学校と地域クラブの共存
ユースリーグ／U-18 フットサル／女子の台頭
「ブラック部活」問題（働き方改革）

II. 全国高体連サッカー専門部『高校サッカー百年』について

1. 高体連が発行する「正史」である！
 - ・ 40 年誌 … 毎日新聞の岩谷俊夫氏の労作
 - ・ 60 年誌 … 40 年誌をベースに関西で育まれた大会をしっかりとカバー
 - ・ 90 年誌 … 本来 100 年で行くところだが待っていると手遅れに。「高校選手権 90 年」で作成。
60 年誌以降の資料といくつかのトピックについての署名原稿で編集
 - ・ 100 年誌 … 上記 3 冊を踏まえた『高校サッカー百年』の正史をつくる！
2. 『高校サッカー100 年』の編集方針と内容
 - 1) 記録 2) 通史 3) 各観点からみた 100 年（コラム） 4) 高校サッカー年鑑等の史料の再掲
3. 現状と今後
2018 年 11 月 販売予定←10 月中旬校了←9 月中旬初校出し←6 月中旬最終原稿締切 しかし…

III. 全国高体連研究大会より一部活動としての「高校サッカー」のすがた

1. 第 52 回全国高体連研究大会 シンポジウム
「そもそも」部活動とは／「これからの」部活動とは
2. 第 50 回&第 51 回全校高体連課題研究
 - ・ 習志野高校サッカー部の取組
 - ・ 札幌南高校陸上競技部の取組

IV. 公開シンポジウム（2018 年 9 月 17 日）へ向けて

はじめに

1918（大正 7）年の 1～2 月にかけて、東京、名古屋、大阪で旧制中学校の蹴球大会が開かれた。これをもって「高校サッカーの始まり」とみなす。そこから 100 年目となる今年、全国高体連サッカー専門部では『高校サッカー百年』を刊行すべく、数年前から準備を進めている。

本日の月例会ではまず、「高校サッカー百年」をざっと振り返って大きな流れを共有し、11 月に発刊予定の『高校サッカー百年』の概要を紹介する。さらに、近年話題となっている「部活動問題」について、全国高体連研究大会で取り上げられた話題などを紹介し、9 月 17 日の公開シンポジウム「部活動を語ろう」につながる議論をしたい。

I. 「高校サッカー百年」を振り返って

1. 大戦前の概観

1918 年 1 月 12～13 日、大阪の豊中運動場で「第 1 回 日本フットボール大会」が開かれた。大阪毎日新聞社（大毎）主催。豊中でいろんなことがはじまっている。1915 年に大阪朝日新聞社主催でいまの高校野球の前身の大会が開かれたのも豊中。

ラグビーの大会をやりたい人が言い出した。けどラグビーをやっていたのは関東では慶応義塾、関西では三高、同志社、京都一商の京都勢、それ以外は YC&AC や KR&AC といった外人クラブぐらいである。慶應義塾を呼んで大会名に「日本」をつけたが、ラグビーの 4 校だけでと淋しいのでチーム数の多いサッカーを加えることにし、ア式の部（サッカー）とラ式の部（ラグビー）が行われた。

2 月 9～11 日には「第 1 回 関東蹴球大会」が東京高師の運動場で開かれた。主催は東京蹴球団。後援は東京朝日新聞社。東京蹴球団は、東京高師や青山師範・豊島師範らの卒業生でつくられた日本人最初のサッカークラブでいまでも活動している。サッカーの老家本元である東京高師が中心となって企画したのでかなり盛大なものとなり、のちの蹴球協会創設にもつながる（後述）。

2 月 17 日には名古屋の鶴舞公園で「第 1 回 東海蹴球大会」が新愛知新聞社主催で開かれた。これらの大会以外にも、大学主催の招待大会などが並立して行われていたが、1926（大正 15）年の第 9 回大会から、大毎の大会では地域予選を勝ち抜いたところが集まる大会となり、1934（昭和 9）年からは JFA 主催の全国大会として一本化されていく。よっていまの高校サッカーにつながる大会は「日本フットボール大会（大毎の大会）」ということになっている。

蹴球大会統一の背景には、1932 年の「野球統制令」の影響が大きい。エリートスポーツであったサッカーに対して、野球は早くから大衆化し、中等学校の競技会も乱立、加熱化し続けた。このような状況をみた当時の文部省が対外試合の基準を設け統制した。大学主催の大会は選手の引き抜きにつながるのでも NG、民間主催大会も過熱化するので NG となり、各地で開かれていた招待大会が開きにくくなる。野球に対する統制ではあったが、他のスポーツにも影響し、1934 年の一本化につながった。

そして戦争の時代に突入。1943 年度にはすべてのスポーツ大会が中止となった。

全日本選手権（いまでいう天皇杯）の優勝チーム一覧（pp19-20 補足資料 1）をみると、戦前の日本サッカーが学校を中心に展開しているのがよくわかる。第 1 回の優勝は東京蹴球団。いまでいう筑波大と学芸大の現役・OB 連合軍である。アストラクラブは暁星の OB チーム、鯉城クラブは広島一中、いまの国泰寺高校の OB チーム。このほかにも神戸一中や早大、関学大、東大、慶応の OB チームが全日本選手権を制している。学校をベースとする多世代型クラブが戦前の日本サッカーの強豪であった。

1935 年に優勝した京城蹴球団はソウルのクラブ。日本の植民地だった朝鮮半島のチームはサッカーのレベルも高く、中学大会も含め何度か日本の大会で優勝している。日本の大会に出場する朝鮮半島の選手の思いは複雑だろう。翌年のベルリン五輪では、代表チームに朝鮮半島から何人選ばれるかが注目されたが、選ばれたのは 2 名のみで 1 名は辞退した。

1924 年に始まった関東大学リーグでは、1926 年からの東京帝大の 6 連覇が目につく。当時サッカーをやっていたのは、ごく一部のエリート層である。地方のエリート校（旧制中学）の出身者は旧制高校

を経て帝大へ行く。当時の王道は、旧制中学から一高（いまの東大教養学部）を経て東京帝大へ進むもの。この流れを作ったのは帝大の野津謙氏や新田純興氏。帝大を強くするには、その予備軍とも言える旧制高校のサッカーを盛んにすればよい。そこで旧制高校の「インターハイ」をつくった。

戦前の日本サッカーは、学校を軸に育成の流れができていた。そしていまの高校サッカーは、全国の師範学校や旧制中学校で行われていたことが、出場校・優勝校一覧から読み取ることができる。

ではなぜそうになっていったのか。1918 年より前のところから振り返ってみたい。

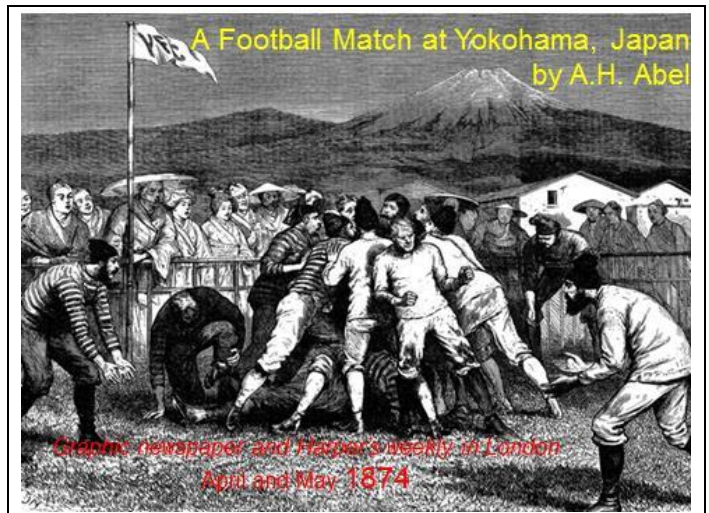
2. 前史～大戦前

■外国人によるサッカー導入

この絵はなんでしょう。

渡辺：押しくらまんじゅうをしている。ボールがあると思われるところの下にも人がある。奥には富士山が見えるので日本ですね。

中塚：YFC の旗がみえます。横浜フットボールクラブです。外人がフットボールをやっているのは確かで、周りで日本人が見ている。



1874 年にロンドンの雑誌で紹介されたもの。1863 年にフットボール協会（FA）ができた 11

年後に、極東の島国でこういうことをやっている。横浜や神戸など、開港したところに外人が住み着き、自分たちが母国でやっていたようなことをはじめたのがこの絵で表されている。

明治元年に横浜に外国人のスポーツクラブができた。横浜カントリーアンドアスレティッククラブ（YC&AC）である。実は今年が創設 150 周年で、月ごとに記念行事が開かれている。10 月はサッカー月間で、シンガポール、バンコク、香港、神戸のクラブと筑波大蹴球部に声がかかり、7 人制のサッカー大会をやることになっている。

スポーツをクラブでやるのは、この頃からの彼らの習慣。神戸レガッタアンドアスレティッククラブ（KR&AC）も 1871 年にでき、両者の対抗戦「インターポートマッチ」は日本最古の定期戦である。

私は毎年 2 月にここで外人さんとサッカーを楽しみ、2 階のレストランでパーティに参加している。

横浜や神戸には、外人さんがスポーツをやっているのを横で楽しむ風土があった。

日本にさまざまなスポーツがもたらされたのは、海外から日本にきた軍人や教師によってである。1872（明治 5）年の野球伝来は、いまの東京大学の英語教師、ホーレス・ウィルソンが紹介した。ベースボールにはまった学生の中に正岡子規がいる。ハイカラな遊技に飛びついた時代だろう。

築地の海軍兵学寮にてイギリスの士官がフットボールを教えたのが日本でのサッカーの最初だとされている。けどダグラス少佐が帰ってしまうと続いていかず、この話はここでおしまい。日本でサッカーが広まるのは学校を通してであった。

■学校を通しての普及—東京高師の役割

教育制度が整えられ、いまの体育「体操」も導入される。そのためには先生を育てなくてはならない。体操の先生を育てるための「体操伝習所」が 1878 年につくられた。筑波大学体育専門学群の前身である。アメリカからリーランドという教師を招いて軽体操を中心に組み組んだが、通訳の坪井玄道は軽体操だけでなく戸外遊戯（スポーツ）を取り入れた。『戸外遊戯法』を著したことで日本サッカー殿堂入りした彼は、日本における体育・スポーツの父であり、筑波大蹴球部の初代部長である。

この話は毎年、筑波大学蹴球部の 1 年生にしている。
坪井玄道の胸像は筑波大の体育センター前にあるのだが、学生たちはあまりわかっていないようだ。

守屋：写真の右側の何ですか？

中塚：棍棒ですね。くるくる回して前腕を鍛える、運動器具の一種です。こういうのを海外から持ちこんで体を鍛えた。

そして 1893 年に嘉納治五郎が東京高師の校長として着任する。彼は 1896 年に「運動会」を設立し、学生は放課後毎日 30 分以上、いくつかの部に入って運動することになった。1901 年に運動会は、文化部も寄宿舎も含めた「校友会」となり、メンバーシップをともなう組織になった。

この学校の卒業生は全国の師範学校や旧制中学の先生になる。イメージは夏目漱石の『坊ちゃん』。いつも悪さをする生徒たちがいて、最後は学校同士の大ゲンカ。あれは松山師範と旧制松山中学のケンカです。このような血の気の多い当時の若者の先生になるのだから、教室で座学だけやってもダメ。心身ともに鍛え、中等教育の現場に赴くののだとの思いが嘉納校長にはあったようだ。当時の東京高師は、柔剣道は必修、2 週間の臨界実習、春と秋はマラソン大会、放課後の部活も当たり前。体育以外の学生もみなこのような教育を受けており、全国各地の赴任先でもこのような教育を実践した。学校スポーツの始まりと広がりスタートに、嘉納校長時代の東京高師がある。

当時、東京高師はいまの御茶ノ水駅前、東京医科歯科大学のあたりにあった。女子高師も同じところにあった。いまの「お茶の水女子大」である。筑波大の同窓会は「茗溪会」という。きれいな水が流れていた。神田川のこと。当時は景勝地だったそうだ。

当時、東京高師はいまの御茶ノ水駅前、東京医科歯科大学のあたりにあった。女子高師も同じところにあった。いまの「お茶の水女子大」である。筑波大の同窓会は「茗溪会」という。きれいな水が流れていた。神田川のこと。当時は景勝地だったそうだ。

1903（明治 36）年に大塚へ移転。いまの茗荷谷駅前で筑波大学東京キャンパスがあり、文京区スポーツセンターがあるところ。その前年に坪井玄道が海外視察から帰国し、いくつかの書物を持ち帰る。

■初代主将中村覚之助と後輩たちの功績

「全生徒は 35 年 5 月、一足先にできた寄宿舎に入舎して、そこから 1 年間お茶の水に通った。大塚の新運動場の予定地は雑木雑草に埋められていたが、中村君以下部員一同整地に努め、蹴球のフィールドに棕櫚縄（しゅろなわ）を張りめぐらして石灰線の代用としたり、ゴールを建てたりした。一方中村君から蹴球に関する運動規約を習って実地訓練を開始した」（堀桑吉の寄稿より）。

中村君とは、東京高師蹴球部の初代主将、中村覚之助のこと。坪井玄道が持ち帰った書物をもとに、日本で根最初のサッカー専門書『アソシエーションフットボール』を著した。単なる訳本でなく、サッカーはどのようなスポーツなのかを、彼自身の考えも含めて著している。

ルールやゲームのやり方は書物でわかる。東京高師内の運動会で模範演技として披露するが、本格的にやっている人を見たことがないから見よう見まねである。当時サッカーをやっていたのは外人倶楽部のみ。そこで覚之助は YC&AC に連絡を取り、試合を申し込む。最初はまったく相手にされなかったが、



おそらく手紙のやりとりで何度も掛け合い、2 軍なら相手をしてもいいよとなり、日本人で最初のサッカーの試合に臨んだ。1904 年 2 月 6 日。日露戦争開戦直前のことである。結果は 0-9。この試合はいまでも毎年 2 月に、筑波大学と YC&AC の交流戦として続いている。

主将の覚之助は試合には出ていない。3 月に卒業する年である。後輩のために試合をマネジメントし、翌日、神田の写真館にわざわざ集合して一枚の写真を撮った。写真の裏には、連戦連敗で 9 回も負けたがこれから頑張るって何とかするぞという決意が書かれている。

中村覚之助がどんな人なのか、気になるでしょう。

サロン 2002 では、2009 年 3 月に「出張サロン in 那智勝浦」を実施、覚之助の生まれ育ったところを訪れ、シンポジウムを開催した。そこは八咫鳥のまち。神武天皇東征の際の上陸地点とされているところもある。大和への道案内を八咫鳥がしてくれたとのこと。

まずはお墓参り。ひととき大きなお墓が覚之助のもの。本家を継いでおられる中村統太郎さんが案内してくださった。この方は YC&AC 戦には必ず上京してこられる。

日本昔話のような家が中村覚之助が育った家。農業と漁業で生活しており現金収入は不要。

覚之助の遺品が衣装ケースの中にあった。百年以上前の学生のノートである。博物科、いまでいう生物学部の学生のノートのなかみはこのとおり。

すごい！ものすごく勉強した。絵心もある。

近代国家日本を形作ろうと、高い志を持って地方から出ていった人たちがホンマに勉強していたことがわかる。『坂の上の雲』の時代である。

卒業証書には「和歌山県平民中村覚之助」とある。嘉納治五郎校長の名がみえる。

校友会の役員としても表彰されている。また彼は遊泳部員としても優秀で、初段を獲得したようだ。

遺品の中に、英語の雑誌や新聞がたくさん出てきた。統太郎さん曰く、覚之助のお兄さんがオーストラリアでクリーニングやをやって、弟や妹が上京して勉強するための現金を稼いでいたとのこと。勉強熱心な弟は、せっかく兄が外国にいるのだから英語の文献を送って、独学で英語を勉強したようだ。

あまり知られていないけど、日本サッカーの始祖と言えるのではないだろうか。

こういう話をことあるごとにしているが、なかなかサッカー殿堂入りにはたどり着かない。

まだ高校サッカー前史の前史。本題にもたどり着かない。

覚之助は卒業後、清国に赴任。清国から多くの留学生を受け入れた嘉納は、逆に優秀な学生を清国に派遣した。しかし覚之助は向こうで病気になり、若くして亡くなってしまう。



覚之助の後輩が全国各地へ赴任し、師範学校や旧制中学にサッカーを広めていった。堀桑吉は東海地区に、埼玉サッカーの父と言われる細木志郎は、牧野信寿は広島へ、内野台嶺は JFA 創設、落合秀保は滋賀サッカーの父。御影師範に赴任した玉井幸助、松本寛治は広島一中のサッカーの礎を開く。刈谷でサッカーを始めた高橋英治は、日本代表監督を経験し「走る日立」の監督を務めた高橋英辰のお父さん。だいたい後になるが河本春男は神戸一中の黄金期を形作る。

覚之助の後輩たちが全国に赴任し、師範学校や旧制中学にサッカーを普及したから戦前の選手権出場校や優勝校は年表のようになる。

卒業生だけでなく現役学生も、各地を回ってサッカーの普及に努めた。

卒業後は全国各地へ！

明37(1904) 中村 覚之助→清国山東省済南府師範学堂
明39(1906) 堀 桑吉 → 愛知第一師範
明41(1908) 細木 志郎 → 埼玉師範
明41(1908) 牧野 信寿 → 広島師範
明41(1908) 内野 台嶺 → 豊島師範
明42(1909) 落合 秀保 → 滋賀師範
明42(1909) 玉井 幸助 → 御影師範
明44(1911) 松本 寛次 → 広島一中
大3(1914) 高橋 英治 → 刈谷中
大9(1920) 北村 春吉 → 静岡師範
昭7(1932) 河本 春男 → 神戸一中

「赴任地にゴールポスト！」
を合言葉に、全国にサッカーを
を広めた東京高師は、「日本サッカーの宗家」です

■極東大会に臨む日本代表は東京高師

1912 年のストックホルム五輪に、2 人の日本人が参加した。ともに陸上競技である。サッカーのような大人数の種目はまだ無理。

サッカーの日本代表が初めて国際試合に臨むのは 1917 年の第 3 回極東選手権大会。東京高師が日本代表として出場するが、中国に 0-5、フィリピンに 2-15 とぼろ負け。フィリピンはアメリカ統治前にスペインが統治しており、もともとサッカーが盛んだった。15 点のうち半分以上をたたき出したパウリノ・アルカンタラは FC バルセロナでも活躍した有名選手。



守屋：師範のユニフォームをそのまま来ている。

中塚：そうですね。胸のマークが Tokyo Higher Normal school の THN になっています。

この大会は高校サッカーが始まる 1917 年度のこと。このままではいかんということを各地の関係者は思ったようです。

ちょうどそのころ新聞社が主催するスポーツイベントがではじめていた。皇居のまわりを走るマラソン大会や、いまの高校野球につながる大会など。新聞社がスポーツイベントを主催する流れの中で、首都圏、東海、関西でユース年代の蹴球大会が開かれた。

■関東蹴球大会と JFA 誕生のきっかけ

関東蹴球大会、新聞では「中等学校優勝蹴球試合、アソシエーション式」とある。主催の東京蹴球団は、当時の東京高師蹴球部長・内野台嶺が組織したもの。大会名誉会長は嘉納治五郎、大会会長は永井道明。会場は東京高師。日本サッカーの本家が企画した競技会と言える。

1918 年にはじまった 3 つの大会のうち、この大会がもっとも盛大で注目されていたと言える。東京でやるので皇族や各国大使も見に来ていた。その中にイギリスの大使がいて、「全国大会の予選がはじまった」と勘違いしたようだ。優勝チームに授けるカップを手配してくれと本国に打電し、日英同盟の仲にあった FA から銀杯が届く。そもそも銀杯を受け取る蹴球組織が日本にはない。大日本体育協会が受

け取ることになり、会長の嘉納治五郎（東京高師校長）は、蹴球部長の内野台嶺に、このカップを争奪する大会を開くことと、そのための蹴球協会設立を命じた。そして 1921 年に JFA ができ、全日本選手権が始まるのである。

JFA 創設には、東京高師附属中の卒業生もいろんな形で関わっている。JFA の初代会長・今村次吉は、陸上から担ぎ出された附属 OB。また東京帝大で野津譲氏とともに旧制インターハイを立ち上げた新田純興は、内野台嶺の手足となって JFA 設立に奔走された。いずれも日本サッカー殿堂で掲額されている。

ちょうどこのころ関東学生リーグが始まる。第 1 回優勝は早稲田大学。ビルマからの留学生、チョウディンの指導の成果が大きかった。ここも附属中が関係している。チョウディンはいまでいう東工大の留学生。ビルマからの留学生 3 名は神楽坂あたりに下宿するが、日本では誰もサッカーをやっていない。あるとき茗荷谷のグラウンドに行き着くと、へたくそだがサッカーをやっている。日本代表の合宿だったようだ。ここへ来ると、大好きなサッカーができるということで、茗荷谷のグラウンドへちょくちょくやって来るようになる。高等師範の学生よりも附属の子どもたちと仲良くなり、その中の一人が鈴木重義。附属中卒業後は早稲田に進学してサッカー部を作った人である。鈴木重義はチョウディンを早稲田高等学院に招いて指導を受け、その早稲田が旧制高校インターハイで優勝し、そのメンバーが第 1 回関東リーグで優勝する。

チョウディンはせっかく工業の勉強をしに来たのに 1923 年 9 月に関東大震災に遭う。直前にサッカーの本『How to Play Association Football』を書きあげるが、震災で校舎が壊れて授業がなくなる。そこで全国各地にこの人を引き連れ巡回指導に回ったのが東京帝大の竹腰重丸氏。有名人がどんどん出てきますね。

高師附属中の卒業生は「もう一つのルーツ校」と言ってもいいぐらい、サッカー界の初期に大きな足跡を残している。東大の新田純興、早稲田の鈴木重義は日本サッカー殿堂入りしているが、明治、立教のサッカー部を作ったのも高師附中の卒業生。東京瓦斯でサッカー部を作った竹内至は FC 東京の創設者とも言えるだろう。

日本人初の FIFA 理事、市田左右一も附属の卒業生。附属のサッカー部員名簿には名前がないが、旧制広島高校から熱心にやり始めたようだ。またダイヤモンドサッカーを日本に紹介し、2002 年 FIFA ワールドカップ招致活動で力を尽くされた諸橋晋六も日本サッカー殿堂入りしている。この人のお父さんは『大漢和辞典』を著した諸橋徹次で、中国留学をサポートしたのが嘉納治五郎。いろんな人がつながってくる。

■「統制」の時代と戦争

関東蹴球大会は 1933 年までやっている。翌年からは関東蹴球協会主催の別の大会となった。

東京高師主催のア式蹴球大会もまた、全国の旧制中学生が目標とする大会であった。東京高師 OB の竹内虎士が『東京教育大学サッカー部史』（1974）に書いた文章から一部引用する。

高等師範が全国蹴球大会をやり出したのは、大正 12 年のことで、当時の主将飯山春雄（文 1 丙）が言い出した提案だ。飯山氏はサッカーの名手と言われる程でもなかったが、こういった企てをはじめ、人を驚かせる名人であった。

1、2 年のさる例会の時、部員一同にこれを提案したのだが、全国大会の全国とは少し大きすぎるのじゃないか、全関東ぐらいでどうかという反論もあったが、関東とすると当時強かった静岡なども来られないではないかということもあり、全国大会を銘打って大会に踏み切った。

さて全国と言っても、どの範囲に招待状を出すかが問題となり、九州を除き、北海道・本州一円に、先ず師範学校を中心に招待状を出してみた。その頃師範学校は中等学校になっていたのも、中学校・師範学校・商業学校のゴッチャナ大会だった。費用は当時ボールの専門店ミカドが引き受けてくれた。50 円出してくれた。今なら 30 万円ぐらいになるだろう。

さて大会を始めてみると、大塚のグラウンドは爆発するばかりだ。決勝・準決勝には地元の青山師範・豊島師範・附属中学・府立五中などが残るので応援団が入り切れない。午後から始まるというのに 10 時頃から青山は附属側、豊島は本校側と席を占領するので、土曜日は午前中から授業ができない程、人が集まった。

その頃武道でも全国剣道大会・柔道大会などをやっていたので、高師在校生はその盛会を目の当たりに見るので、全国的な視野が植えつけられたと思う。殊に全国のサッカーは我々が指導しているのだとするリーダーシップがある。その頃、大塚講和会などは全国を行脚して回ったので、当時の高師生は今よりはるかに視野は広がった。

ところが、盛大になるといろいろな文句がついてくる。これは一種のひがみだが、審判が悪いの運営がまずいと言い出す(中略)。これを最も強く主張したのは大日本蹴球協会の理事会であった。協会は協会主催として中学大会を一本にしたいという意図があったので、一本に統制するには夏は高師の大会、冬は朝日新聞の関東大会がじゃまになった。朝日は運動部の山田午郎がどうしてもやめない。こちらは純情だから、遠き将来の日本サッカー界を考えるとどうしても一本にした方がよいじゃないか。それにサッカーは冬をシーズンとするもので、夏の暑いさなかにやるとは如何にもひどいじゃないかともっともらしく主張されると、ついそんな気持ちになるものだ。それにその頃高師のサッカー部は、かつての栄光の座からすべり落ちて、1 部と 2 部の間を往復していた頃で、発言力が弱かったのである。参加者の立場からすれば、年中大会があつては生徒は勉強する暇がないので、それは教育的にみてもよくないと、これも協会のつけた理屈だった。

この統制令をしくことなどは文部省のやり方である。大会に参加することは任意だから、いやなら参加しなくてもよいのだ。協会の使命は統制よりもサッカーを盛大にすればよいのだ。あの頃、もっと大きな気宇の人が協会にいたらこのような文部省のやるようなやり方はしなかったであろう。そのような強引な統制のためサッカー発展に 20 年の遅れが出たことを、40 年の年月を過ぎた今にして、はっきり証言することができる。

忘れもしない昭和 8 年の 6 月、協会の勧告に従って、協会に帰すべきか否かの例会が開かれた(略)。皆はいいやいや納得してくれたが、面倒な大会をやめてリーグ戦一本になろうじゃないかという消極策はチームそのものも決して強くならなかった。翌年は 2 部に落ちてしまった。しかし若いエネルギーは無限だ。人生においてもサッカーにおいても、前身あるのみだと思った。」

この大会も、野球統制令の翌年、1933 年を最後に終わっている。

この大会の第 1 回大会優勝は暁星中。その他は、1 度だけ静岡の志田中(いまの藤枝東高校)が優勝しているがそれ以外はすべて東京高師附属中が優勝している。

一方、文理大(このころの登録名は東京高師ではない)は 2 部降格、1 年で昇格。主将は河本春男。後に神戸一中の黄金期を形作り、賀川浩さんのご近所だった方である。戦後はユーハイム社長。

1930 年に日本が初めて極東大会で優勝。監督は鈴木重義。主将は竹腰重丸。

このメンバーをみると、戦前、学校制度の中で育成するシステムができていたことがわかる。大衆のスポーツではなかったが、ある一定層の人たちが、旧制中学・高校・そして大学のサッカー部でキャリアを積み、トップ層を形成していた。

東京高師主催ア式蹴球大会

◆歴代優勝校(中学の部)

- 第1回(1924・大正13) 暁星中(附属中は初戦で成城中に抽選負け)
- 第2回(1925・大正14) 附属中3-1暁星中
- 第3回(1926・大正15) 附属中6-0成城中
- 第4回(1927・昭和2) 附属中2-0五中
- 第5回(1928・昭和3) 附属中3-2五中
- 第6回(1929・昭和4) 附属中2-0五中
- 第7回(1930・昭和5) 附属中3-1湘南中
- 第8回(1931・昭和6) 志田中0-0再2-1(延長)附属中
- 第9回(1932・昭和7) 附属中5-3志田中

◆文理大 初の2部降格

1931(昭和6)年度の第8回大会は2部→1年で昇格
主将 河本春男(刈谷中→東京高師)

◆附属中の躍進

師範学校は附属小学校を持っている。御影師範附属小でサッカーを始めた子が神戸一中でサッカーを続け、旧制高校の落ち着いた中でサッカーを楽しみ、帝国大学で…という流れができていた。

1930 年の極東大会で優勝したが、1932 年のロス五輪でサッカー競技は中止。メンバーの多くはサッカー選手としてのキャリアを閉じる。にもかかわらず次のベルリン五輪で優勝候補のスウェーデンを破るぐらい力を持った選手が育っていた。学校教育の中で育成されるシステムは機能していたようだ。

しかし戦争が襲いかかる。志田中から東京高師で活躍し、スウェーデン戦で逆転ゴールを決めた松永行はガダルカナルで。主将の竹内梯三もシベリア抑留中に命を落とす。

大戦中の数年間について、『東京教育大学サッカー部史』から一部引用する。

昭和 17 (1942) 年「松永信夫主将を中心に、1 部昇格を目指して健闘した年です。慈恵大・農大・法大・拓大・工大に全勝して宿願を達成しました。」

昭和 18 (1943) 年「近藤豊蔵主将の年ですが、リーグの成績は上のように (帝大・早大・慶大・文理大・立大・明大)、第 4 位にとどまりました。

なお、大日本学徒体育振興会蹴球部関東支部主催の第 2 回関東選手権大会の成績は次のように、1 回戦に敗退したとはいえ、優勝校の帝大に善戦しました(全文大 0-1 全帝大)」

昭和 19 (1944) 年「私達が 4 年生になった時には、もうサッカーどころではありません。赤羽被服廠や栃木県の農家へ勤労働員で駆り出され、6 ヶ月の短縮で 9 月卒業。陸・海・空へと四散して行きました。謝恩会を、大曲の旅館で暗幕を張った灯火管制の下でやったことを思い出します。」「スポーツは全面的に禁止され、体力増強・精神力養成を目標とした官制的行事が、半強制的に推進されて来たわけである。自由にボールが蹴れる時代は、本当に幸せな時代である。いつまでもボールを蹴り、ボールから学んでいきたいものである。」

前史と戦前までの話はここでおしまい。

守屋：戻りますが、外人がフットボールをやっていた写真。下は芝生でしたね。芝だか雑草だかわかりませんが

中塚：何か生えていますね。ちなみに YC&AC のグラウンドは天然芝でしたが、いまは人工芝になっています。

第9回極東選手権優勝メンバー

ポジション	氏 名	生年月日	出身中学	出身高校	出身大学	試合出場 フルタイム	予選出場
監督	鈴木 豊雄	1902(明治35)年10月26日	東京高師附属中	早稲田高等学院	早稲田大	-	-
FW	香山 希雄	1906(明治39)年4月4日	東京高師附属中	水戸高校	東京帝国大	○	○
	香林 竹雄	1907(明治40)年8月29日	神戸一中	松山高校	東京帝国大	▽	▽
	手島 吉郎	1907(明治40)年2月26日	広島高師附属中	広島高校	東京帝国大	○	○
	篠島 秀雄	1910(明治43)年1月21日	東京高校専修科	東京高校	東京帝国大	○	○
	高山 忠雄	1904(明治37)年6月24日	神戸一中	第八高校	東京帝国大	○	○
HB	市橋 時三	1909(明治42)年5月9日	神戸一中	慶応大予科	慶応義塾大	△	△
	本田 長康		東京高師附属中	早稲田高等学院	早稲田大	▽	○
	竹橋 豊丸	1906(明治39)年2月15日	大連一中	山口高校	東京帝国大	○	○
FB	井出 多夫	1908(明治42)年11月27日	東京府立五中	浦和高校	東京帝国大	○	○
	竹内 梯三	1908(明治42)年11月8日	静岡中	早稲田高等学院	早稲田大	△	○
	後藤 朝雄		関西学院中	関西学院中	関西学院大	○	○
GK	青柳 才三	1908(明治42)年9月24日	桃山中		関西学院大	○	○
sub							
HB	西村 隆		神戸一中	松山高校	京都帝国大		
	大野 薫				東京帝国大		
FB	杉村 正二郎	1907(明治40)年9月16日	天王寺中	早稲田高等学院	早稲田大		
	近藤 台五郎		東京高師附属中	水戸高校	東京帝国大		
	岸山 義夫			第八高校	東京帝国大		
GK	阿部 順二	1909(明治42)年1月27日		浦和高校	東京帝国大		

注) 試合出場欄は、○フル出場、▽途中退場(交代)、△途中出場



3. 大戦後

1) 大学サッカー—東教大と中央大を通して

右は戦後はじめて東京教育大が関東リーグで優勝したときのメンバー。高校サッカーでおなじみの鈴木勇作氏がおられる。隣の成田十次郎氏はクラマー招聘のキーパーソン。原爆の後遺症で若くして亡くなった福原黎三氏は浦和高校・広島大学附属で教鞭を執られた。サッカー殿堂入りされた東洋工業の小澤通弘氏もいる。村岡博人氏は 1954 年の W 杯スイス大会予選、史上初の日韓戦の GK。この試合は朝鮮戦争あけの 3 月 7 日と 11 日に明治神宮競技場で行われた。大雪上がりでメチャクチャ寒かったらしい。長沼健氏が先制するが 5 点取られて 1-5 で敗れ、第 2 戦は 2-2 引き分けで韓国が W 杯に初出場する。本大会ではハンガリーに 0-9、トルコに 0-7。ヨーロッパとの差はこれほどあった。



中央大学と筑波大学の定期戦は 1959（昭和 34）年にはじまる。当時全盛の中央大を倒すことが、教育大全国制覇の第一歩だということではなかったらしい。

今日のテーマに関係するところで、中央大学の夏の遠征に言及したい。

まずは丸山義行氏の文章から（『中央大学サッカー部 80 年史』2008）

私が入学したとき（昭和 25＝1950 年）から、サッカー部は夏休みを利用して、全国各地に遠征合宿をしていました。全国各地で試合をしたり、試合の相手がない時には、小中学生を集めて練習会を行いました。遠征先は、仙台、盛岡、秋田、青森、函館、小樽、札幌、旭川、釧路と廻り、釧路で解散し各自帰宅しました。翌年は南に行き、その行き先は、徳島、高松、松山、大分、延岡、宮崎、鹿児島、熊本、島原、長崎、防府、広島と廻り、広島で解散しました。

食糧事情も悪く、交通事情も悪い中、しかも 7 月の暑い時にどうして遠征合宿などをするのか、中大サッカー部は馬鹿じゃないかと笑われましたが、サッカーがまだ普及していない時代に、小野監督はサッカーの普及と、中大サッカー部を全国各地の人達に知ってもらうことのふたつを大きなテーマとして、約 20 年間続けました。

次に三村烙一氏（『中央大学サッカー部 80 年史』2008）

恒例となっていた仙台の東北学院との交流試合をメインの行事とした夏の東北、北海道への強化遠征はつらかった。昭和 25 年頃の時代に、東北、北海道に新幹線などあるわけもなく、急行列車に乗車する費用すら節約された。次の遠征地への移動のための鈍行列車の車内が宿屋であり、洗濯したユニフォームの干し場となった。北海道での帰りの切符 1 枚を渡されての現地解散は、小遣いを使い果たした学生にとっては厳しい現実であった。そうやって東北、北海道の各地に中大サッカーの足跡を残し続けた時代であった。

いまからすればとんでもない事業ではあるが、「サッカーの普及と、中大サッカー部を全国各地の人に知ってもらう」このような試みが、地方のサッカーの普及・発展につながっていったと言える。大学サッカーと高校サッカーつながりはいろんなところにある。

2) 大戦後の高校サッカーの大まかな流れ

大戦後の様子を年表に沿ってみたい。

1946 (昭和 21) 年、終戦翌年の 5 月 5 日に全日本選手権 (いまの天皇杯) が開催され、前座試合として中等学校東西対抗戦をやっている。東日本は東京高師附属中で西日本は神戸一中。1-0 で附属中が優勝している。翌年には国体がはじまり第 1 回は湘南中が優勝。

そして 1948 年、学制改革で新制高校が誕生。高体連も発足する。

1963 年には高校総体がはじまり、1966 年からサッカー競技も加わるが、ここで長らく選手権大会を主催していた毎日新聞が主催から外れ大変なことになる。

1970 年に国体は選抜チームの大会となり、同年度の選手権からテレビ放送がはじまる。毎日新聞社撤退後の運営に明るい兆しが見えてきた。テレビ放送の影響は大である。

そして 1977 年 1 月から、全国高校選手権大会は首都圏で開催されるようになる。決勝の浦和南 5-4 静岡学園の試合は大きなインパクトを残した。

一方、1970~80 年代にかけてトップレベルのサッカーはしょぼい時代であった。W 杯はもちろん五輪にも手がかからない。日本サッカーリーグは閑古鳥が鳴く様子。その中でサッカー人気をささえていたのは高校サッカーであった。少年サッカーの普及もみられた。

1993 年の J リーグ発足は、日本のスポーツ界の革命であった。新しい時代の到来である。

ユース年代のサッカー環境は大きく変化した。従来のノックアウト方式の競技会だけでなく、生活にスポーツを根ざすにはリーグ方式が不可欠であるとの認識で、各地でユースリーグが始まった。1996 年から始まる DUO リーグはその先駆けである。1997 年には関東スーパーリーグが強豪校の間で始まる。

J リーグが盛り上がる一方で、高校サッカーの人気は低落し始める。高校選手権決勝を再び満員にすべく 2003 年より選手権決勝を成人の日に行うようになり、いまでは再び満員のスタジアムで決勝が行われている。

リーグ戦はその後、全国各地にレベル別に整備されており、中学生、小学生の年代までもリーグ環境が整えられている。

大戦後の様子を駆け足で見た。

4. いま

日本のスポーツ界をリードしているのはサッカー界である。頂点のプロだけでなく、育成年代においても他のスポーツのモデルとなるような取り組みをしている。世界に誇れる日本の学校スポーツを土台にしつつ、地域クラブや J クラブとも連携、共存し、いろんなルートで人が育つ環境をつくろうとしている。ユースリーグ、U-18 フットサル、女子についても、さまざまな課題はあるが徐々に整備されてきた。サッカー界が他のスポーツのモデルとなることが望まれる。

その一方で、近年「ブラック部活」との表現で部活動の在り方を見直す動きや、「働き方改革」の名のもとに教師の関わりを見直す動きが進んでいる。

II. 全国高体連サッカー専門部『高校サッカー百年』について

1918 年から 100 年目の今年、全国高体連サッカー専門部では百年誌を発刊すべく準備を進めている。

1. 高体連が発行する「正史」である！

- ・ 40 年誌 … 毎日新聞の岩谷俊夫氏の労作
- ・ 60 年誌 … 40 年誌をベースに関西で育まれた大会をしっかりとカバー
- ・ 90 年誌 … 本来 100 年で作るところだが待っていると手遅れに。「高校選手権 90 年」で作成。60 年誌以降の資料といくつかのトピックについての署名原稿で編集

これまで 3 冊の年史ができています。今回の百年誌は、上記 3 冊を踏まえた『高校サッカー百年』の“正史”と位置付けている。

2. 『高校サッカー100 年』の編集方針と内容

内容的には、1) 記録、2) 通史、3) 各観点からみた 100 年（コラム）、4) 高校サッカー年鑑等の史料の再掲で構成される。高校サッカー年鑑を毎年発行している講談社で作成する。

3. 現状と今後

2018 年 11 月販売予定←10 月中旬校了←9 月中旬初校出し←6 月中旬最終原稿締切 しかし…

私も編集委員の一人である。委員会発足は早かったものの、計画的・組織的に仕事が進められず、困っている。

それでも年内完成は決まっている。やらねばならない…。

Ⅲ. 全国高体連研究大会より一部活動としての「高校サッカー」のすがた

このあたりから「部活動問題」を取り上げていきたい。

高体連の組織は、競技団体の集まりである「専門部」と、あまり知られていないが「研究部」で構成されている。ひょんなことから 2008 年に全国高体連研究部活性化委員長を仰せつかつてはや 10 年。この間、年 1 度の全国研究大会で課題研究を導入するなど、さまざまな改革を進めてきた。

全国研究大会には、各都道府県や専門部の代表が全国各地から 500 名ぐらい集まってくる。高校生のインターハイと並ぶ高体連の二大行事の一つであり、部活に熱心な人たちが集う会である。今年 1 月の第 52 回全国研究大会（島根開催）では「2020 年へ向けて－高体連研究部の新たな使命」と題するシンポジウムを開き、部活動って何だろうということを問題提起した（pp21-24 補足資料 2）。

活性化委員会のアドバイザーでもある早稲田大学の中澤篤史氏には、シンポジウムで「そもそも部活動とは何か」について、諸外国との比較や歴史的視点から話をしてもらった。中澤さんの許可を得て、当日のスライドを用いながら内容を紹介したい。このスライドの写真は撮らないように。

■海外との比較

海外にも部活動はあるのか。

「日本の部活はアメーjing」という見出しである。柔道事故で亡くなった高校生の話や、大阪のバスケットコーチによる暴力の話が海外の新聞で取り上げられている。「考えられない」とのことである。

世界の中高生のスポーツ環境を整理すると、日本は学校中心の大規模型。

ではアメリカやイギリスではどうなっているのか。

アメリカでは、選手コースはちゃんとした施設・指導者の下でやっている。そのお金は、近所のピザ屋さんなど、近隣の企業がお金を出してささえている。学校が地域の中にあり、地域がサポートしてお金を回しながらやっている例が紹介された。

イギリスの部活動はもっとのんびりしたスタイルである。やりたいことを週 1 回やって楽しむような感じ。

補足があればお願いします。中小路さん、いかがでしょうか。

中小路：朝日新聞の中小路です。サッカーなどの取材が長かったけど、最近は部活動やスポーツの事故のことを取材することが多いです。今日はこのテーマなので来ました。補足は、とくにありません。

嶋崎：学校中心型の中国・韓国の話を少し。留学生の方に聞いた話ですが、中国や韓国では将来のエリートが体育学校に集められている。けれどそこからドロップアウトすると、プレーの場がなくなる。一般的にスポーツはお金を払って楽しんでいる。

齊藤：高校サッカー部の生徒がアメリカの学校に留学した経験を聞いた。基本的にはシーズン制。冬はサッカー部が活動し、それが終わるとアメフト。州によって違うかもしれないがだいたいこうである。州ごとの大会は整備されている。シーズン初めにまずセレクションがある。50 名ぐらい応募があつて 20 名ぐらいにしばらく込まれ、少人数で活動する。彼は高校入学前、サッカー推薦で強豪校へ行けるぐらいの力があつたが、それらを蹴ってうちの高校に来た。留学できるから。留学先の高校では、アリゾナ州選手権でベスト 4 になり、得点王とベストイレブンにもなった。そのことを調査書にも書いたところ、進学先の明治大学では「体育会でやってくれないか」と言われたが断り、英語クラスに入り勉強、いまは某大手商社で働いている。

私自身、ドイツに住んでいたことがある。州によって違うかもしれないが、高校まで部活動はない。あるのは大学のみ。私が所蔵していたところも練習は週に 1 回。大学よりも当然、クラブがメイン。大学ではお金は出ない。ただ大学の組織は大きい。北ドイツ選手権、南ドイツ選手権があり、年に 1 回、その大会のために、各クラブでやっている大学生が選抜される。私のチームメイトにも北ドイツ選手権に出て学生のドイツ代表になった者がいた。けど大学の試合では「試合前日でもビールを飲んでます」とのこと。やはりクラブの方がメイン。

中塚：そういうメンバーがユニバーシアードに出ているのですか？

齊藤：そうですね。大学に登録していないと出られないので。

■歴史的な視点

大戦前の校友会活動としてやっていた部活動の加入率は、戦後から現在に至るまで、上がっている。任意参加なのに加入率が 100% の県もある。

戦前の教育が否定され、戦後の教育が始まった。写真は高校野球の開会式でポール・ラッシュ氏がスピーチしているところ。スポーツは自由と自治の象徴であり、課外活動としての部活動は民主主義を学ぶ場として重視された。ただ、スローガンとしては成立するが、そもそも民主主義とは何かがよくわかっていない。残念ながらうまくいかなかった。そして民主主義とは異なるものに振り回される。

1964 年の東京五輪前後で部活動のあり方は大きく変わってくる。五輪前は選手中心主義。選手強化の名のもとに、大会参加年齢の基準もどんどん下がり、国体に中学生が参加できるようになる。民主主義を学ぶ場だった部活動が、選手中心主義になる。これではいかんということで、五輪後に平等主義が出てきた。幅広くスポーツを誰もが経験できる場として部活動をとらえるべきという考え方である。

そんな中で「必修クラブ」も生まれる。自主参加が前提のクラブなのに、必修がくっついてくる。矛盾だらけである。しかも評価の対象となる。わけのわからん状態。

そのころから青春ドラマで部活動はよく取り上げられていた。やんちゃな高校生が熱血教師の下でラグビーやサッカーをやり、汗と涙と根性で、青春を謳歌していく物語である。それが 1980 年代ごろから「スクールウォーズ」など、スポーツで更生していく話になってきた。スポーツは非行防止の手段。管理主義の中で、学校の中での部活動が生徒指導とワンセットとなって推奨される。こうした中で、部活への加入率は上がっていくのである。

民主主義を学ぶ場に始まり、選手中心から、大衆化した平等主義へ。そして非行防止の管理主義。部活動の拡大プロセスである。

こういう話を、全国研究大会に参加している部活に熱心な先生の前でもらった。大いに反響があった。中澤さんの著書『部活動のこれからを語ろう』は読みやすいのでおススメ。このシンポジウムのあとで売れたかどうかはわからないが…。

■部活動のこれからのために

高体連研究部として為すべきことを、そのシンポジウムで述べさせてもらった。次のとおりである。

1. 目指すべき部活動の姿を示す
 - 1) 安全で安心な部活動を目指して
 - 2) 多様な価値観の受け皿となる部活動を目指して
 - 3) 自主性や創造性を育む部活動を目指して
 - 4) 学校生活を構成する「学校文化」として
2. スポーツと教育のあるべき姿を示す
 - 1) 勝利至上主義の弊害とゆたかなスポーツ文化の享受
 - 2) オリンピック教育の可能性と実践事例
3. 学校教育における部活動の位置づけと、その解決策を示す

「世界に誇れる日本の学校体育」はすごいことだと思う。嘉納治五郎のころから 100 年以上かけて形作ってきた仕組みは素晴らしい。

その一方で、「どこかおかしい」のも事実。体育とスポーツが混同し、“遊び（プレイ）”が否定される傾向にあるのはおかしい。「最後の大会が終わって引退」。アマチュアスポーツなのに引退があるのはおかしい。こういうことをいろんなところで言っているのだからなかなか変わっていかない。

学校の中だけでやっても無理。限界がある。もっと開いていかないと…。

■部活動のこれからの事例

全国研究大会の「課題研究」では、さまざまな競技専門部の指導者に、参考になるような実践事例を報告してもらっている。

2015 年度の研究大会では、千葉県の砂金（いさご）さんに、市立習志野高校サッカー部の取り組みを発表してもらった。ご存じのとおりサッカー強豪校で、部員は 200 人もいる。レベル別のチームでサッカーのプレーをしているが、一方で全部員は、部内にある 7 つの委員会のいずれかに所属してささえる活動に取り組む。ゲームマネジメント、エンバイロンメンタルプレパレーション…、横文字が多すぎる。テクニカルスタディ委員会は、対戦相手のゲーム分析などを行う。プレーするだけでなく、こういうところでも力を発揮する。こうすることで多様な能力開発にもつながっているとの発表であった。

翌 2016 年度は、札幌南高校陸上競技部の取り組みが紹介された。これも同様の取り組みである。インターハイにたくさん選手を出しているが、それだけでなく、卒業生のお医者さんがチームドクターとして帯同、メンタルケアも卒業生が。現役部員もサポートチームを作り、勉強しながら活動をささえている。近隣子どもたちへの指導も行っている。

プレーするだけでなく、プレーのまわりにあることに目を向けたこういった活動は、部活動にとってとても大切なことではないか。

大学の話になるが、筑波大学蹴球部の組織図を持ってきた。2017 年度第 6 回若友サッカークラブの理事会資料である（個人情報もあるので公開不可）。160 人いる筑波大学蹴球部。レベル別にいくつかのチームに分かれて活動するが、全部員が何らかの「局」に所属してささえる活動にも取り組んでいる。最初は総務・会計・審判・トレーナーぐらいしかなかったが、2 部降格を機に「パフォーマンス局」ができ、ゲーム分析などに取り組み成果を上げている。去年からは「プロモーション局」ができ、スポン

サーの獲得や自分たちの価値をどう表現していくかに取り組んでいる。今年からは「グローバルチーム」もできた。何をやっているのかよく知らないが…。

大学でやっているようなことを高校の部活でも取り入れていいのではないかな。

私が顧問をする筑波大学附属高校蹴球部もおもしろい構造になっているし、ユニークな取り組みをしている。

歴史と伝統ある 11 人制のサッカー部。レベル的には大したことはないけどそれなりに一所懸命取り組んでいる。あるとき女子部員が入部し、1 年後には後輩が 5 人入ってフットサルができるようになった。女子部の誕生である。いまでは女子部員が一番多い。

フットサル部も、バリバリの競技志向はいやだけどボールを蹴るのは好きという生徒が作った部門。これら 3 部門（チーム）が一つのクラブを構成している。すぐにできたわけではない。定点観測しながら少しずつ働きかけ、いまに至る。

写真は 3 部門合同の合宿の様子。OBOG もわんさかやってくる。

全体で合同 MTG をするとこういう状態になる。
かなり混み込み。

2004 年に創部 80 周年を迎え、記念にシュート版を OB 会から寄贈してもらった。

3 部門合同でクラブとしての取り組みとして、年 2 回の昼休みフットサル大会が挙げられる。部員外にもフットボールを広める機会であり、われわれ教師もチームを作って参戦する。

東日本大震災の時にはチャリティマッチをやった。一日で 20 万円も集まってびっくりした。

被災地の中学サッカー部を東京に招いてチャリティサッカーをやったり、DUO リーグの 8 人制大会を自主運営したり、サッカーのプレー以外でもいろんなことを、楽しみながらやっている。

毎年 4 月末、新入生がある程度確定したところで「この部はどういう部なのか」を生徒たちにレクチャーしている。それがちょうど明日。その資料を持ってきた。少しずつ進化して今の形になっている。

競技志向のサッカー部からフットサル部が分かれたときの言い出しっぺの生徒が、「サッカー部は幅広くいろんな人を受け入れるべきだ」と主張する文書も毎年配布している。この文書を作る上で、この生徒とはいろいろ話をした。語り継がれていく物語があるから、おもしろい組織になる。

けど最近、生徒たちにこういった話がきちんと伝わらないもどかしさを感じる。文字では伝えているがハートで伝わらない。「おもしろい」と感じる生徒が減ってきたのかもしれない。総じて“遊が”が下手である。何とかしていかないと…

9 月のシンポジウムでは、「高校サッカー百年」に限定することなく、幅広く部活動問題を取り上げられるようなシンポジウムにしていきたい。ラグビーを、女子を、U-18 フットサルを取り上げ、これからの部活動について議論していきたい。けど、すでに盛り込みすぎですね…。続きは場所を変えて。



IV. ディスカッション

嶋崎：部活の加入率の上昇は必修クラブとの関係が大きい。必修クラブ導入で、週 1 回は何らかのクラブに入るようになった。その 10 年後、部活動代替措置が導入され、部活動に入っていれば必修クラブに入らなくても単位がつけられるようになった。すると、必修クラブよりも授業をやりたいふつうの学校では、必修クラブをなくして全員を部活に入れてしまう。埼玉県はほぼすべてがそうになった。必修クラブがなくなっても中学で 100% 加入というところがあるのはそのときの名残。

守屋：習志野高校の事例は高校生にしてみるとやり過ぎではないか。誰が教えるのか。中塚先生は好きでやっているからブラックにならないけど、習志野は転勤があるし…。

中塚：顧問はけっこういるようだ。卒業生の手も借りながらやっている。

嶋崎：砂金さんは今春、異動になりました。

北原：異動先の幕張総合でもやっている。ここは以前から地域のクラブとの連携が進められている。千葉ではある意味トレンド。みんなで補欠ゼロを具現化したい雰囲気もある。

守屋：筑波大の組織は皆プレーヤー？

中塚：もちろんプレーもします。いまフレッシュマン合宿をやっていて、ひと通り終わったところで入りたい「局」の希望をきき、上級生がセレクトする。最近できた横文字の 트렌ディな局の人気の高いようです。パフォーマンスやプロモーションなど。けどホンマは、会計や総務など、根っこのところが大事なのですけどね。地味なところは人気がない。学連はどこかに含まれている。

日本版 NCAA 創設に当たり、筑波大でもモデルケースを作らなあかん。蹴球部同窓会茗友 SC の理事長を 10 年間続けてきたが、4 月 7 日の臨時総会で大きな組織改革をした。10 年前に「茗友サッカー 120 プロジェクト」と銘打って、現役と OB を含めた組織に改めた。現役と OB が一体となって、大学を母体としたクラブを作ろうという取り組みをはじめた。しかし 10 年経過する中で、大学スポーツが質的に変わってきた。学生の自主的活動というよりも、大学の教育活動の一環として、執行部が本腰を入れてやるようになった。そうなってくると、現役蹴球部と OB が重なって見えるいまの茗友 SC のすがたは都合が悪いという話が現場から出てきて、10 年やったトライアルは見直すことになった。中高の部活動問題が大きな話題となっているが、大学の部活動をめぐってもさまざまな問題がある。そして大学がどのように変わっていくのかが中高の部活動のあり方にも関わっていくと思う。

嶋崎：今春発表された「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」もリンクしていく。時間数・日数の制限は NCAA の考え方。大学では学業優先にしなければというところから縛りをかける必要が生じてきた。大学野球では平日に授業を抜けて公式戦をやっている。これはいかがなものか。そういう文脈は一緒。スポーツ庁で出しているものはリンクしている。大学スポーツのあり方見直しは、中高に降りてくる。

小池：京都大学のアメフト部が去年あたり法人化した。大きな金額を扱うので権利義務の主体をはっきりさせる意図もあったと聞いている。

嶋崎：大学運動部の会計は不透明。どんぶり勘定というところもある。アスレティック・デパートメントをつくって大学が管理することになった。国際武道大はもともとそうになっている。

筑波大では企業が入って改革を進めている。ドームという会社。アンダーアーマーの代理店。筑波大のユニフォームを一手に取り扱おうとしている。関東学院のユニフォームもブルー系が緑に変わった。筑波大学も薄いブルーの統一カラーに変わってきた。筑波大学では教員はあまり関わることなく、乗り込んできたドームが学長と進めている。

中塚：ユニフォームカラーの問題はアンダーアーマーが登場する前にあった。大学のブランディング戦略の中で運動部のユニフォームカラーを統一する話が出てきた。金栗四三のころから陸上部は紺色だしバレー部は緑色。蹴球部はネイビーブルーをクラブ色としていたが、大学執行部に「つくばブルー（FUTURE BLUE）」なる色で統一せよと言われた。各部の対応はまちまちで、蹴球部は最後まで抵抗したが、最終的には受け入れざるを得なかった。けど、あの色のユニフォームを着なくてはならない最初の年度は、裏地にネイビーブルーを縫い込んで魂をそこに残すことまでやった。

守屋：ジャパンの色も統一してほしいですね。競技ごとにバラバラ。

中塚：最後に小山さん、部活動のことをずっと追っておられますが、いかがですか？

小山：スポーツは楽しくないやだめだと思う。私も高校時代、アメフト部に入部したときは好きだった。入部したときはテンション高かったけど、どんどん下がっていった。無知な僕をもっと好きにさせてくれていたら、アメフトをいまでも楽しめただろうに。高校の部活動で嫌いになったのが残念。好きにもいろいろある。ハイレベルでやりたいのもあれば、草野球でいうとボールが取れなくてもおもしろいというものもある。そのレベルに応じて楽しみ方はあっていい。部活改革をしていきたい。今日の内容は、以前のシンポジウム（日本サッカーのルーツを語ろう）でお聞きした話のバージョンアップであった。歴史を踏まえて、次の上澄みを作っていく必要がある。今日は勉強になりました。

中塚：最後に、日本部活動学会設立趣意書（p.25 補足資料 3）をご覧ください。こういう学会が昨年末に立ちあがった。こういうところと連携しながら部活動問題にアプローチし、9 月のシンポジウムを形にしていきたい。今後ともご協力を。

各年代競技会(主なもの) 歴代優勝チーム

19

50	昭45	1970	ヤンマー	東洋工業	44	立教大	4位	49	1970	藤枝東	浜名
51	昭46	1971	三菱重工	ヤンマー	45	早稲田大	4位	50	1971	習志野	壬生川工
52	昭47	1972	日立製作所	ヤンマー	46	早稲田大	8位→2-1東農大	51	1972	浦和市立	藤枝東
53	昭48	1973	三菱重工	日立製作所	47	法政大	5位	52	1973	北陽	藤枝東
54	昭49	1974	ヤンマー	永大産業	48	中央大	6位	53	1974	帝京	清水東
55	昭50	1975	日立製作所	フジタ工業	49	早稲田大	6位	54	1975	浦和南	静岡工
56	昭51	1976	古河電工	ヤンマー	50	早稲田大	4位	55	1976	浦和南	静岡学園
57	昭52	1977	フジタ工業	ヤンマー	51	法政大	2位	56	1977	帝京	四日市中央工
58	昭53	1978	三菱重工	東洋工業	52	中央大	5位	57	1978	古河一	室蘭大谷
59	昭54	1979	フジタ工業	三菱重工	53	法政大	2位	58	1979	帝京	韭崎
60	昭55	1980	三菱重工	田辺製薬	54	筑波大	優勝	59	1980	古河一	清水東
61	昭56	1981	日本鋼管	読売クラブ	55	日本体育大	4位	60	1981	武南	韭崎
62	昭57	1982	ヤマハ発動機	フジタ工業クラブ	56	国士館大	4位	61	1982	清水東	韭崎
63	昭58	1983	日産自動車	ヤンマー	57	筑波大	優勝	62	1983	帝京	清水東
64	昭59	1984	読売クラブ	古河電工	58	国士館大	3位	63	1984	帝京・島原商	
65	昭60	1985	日産自動車	フジタ工業	59	国士館大	7位→0-0青学大	64	1985	清水市商	四日市中央工
66	昭61	1986	読売クラブ	日本鋼管	60	東海大	5位	65	1986	東海大一	国見
67	昭62	1987	読売クラブ	マツダSC	61	筑波大	優勝	66	1987	国見	東海大第一
68	昭63	1988	日産自動車	フジタ工業	62	筑波大	優勝	67	1988	清水市商	市立船橋
69	昭64/平元	1989	日産自動車	ヤマハ発動機	63	国士館大	3位	68	1989	南宇和	武南
70	平2	1990	松下電器	日産自動車	64	順天堂大	8位→1-0法政大	69	1990	国見	鹿児島実
71	平3	1991	日産自動車	読売クラブ	65	国士館大	4位	70	1991	四日市中央工・帝京	
72	平4	1992	日産FC横浜マリノス	読売ヴェルディ	66	筑波大	優勝	71	1992	国見	山城
73	平5	1993	横浜フリューゲルス	鹿島アントラーズ	67	筑波大	優勝	72	1993	清水市商	国見
74	平6	1994	ベルマーレ平塚	セレッソ大阪	68	筑波大	優勝	73	1994	市立船橋	帝京
75	平7	1995	名古屋グランパスエイト	サンフレッチェ広島	69	国士館大	2位	74	1995	静岡学園・鹿児島実	
76	平8	1996	ヴェルディ川崎	サンフレッチェ広島	70	早稲田大	6位	75	1996	市立船橋	桐光学園
77	平9	1997	鹿島アントラーズ	横浜フリューゲルス	71	国士館大	4位	76	1997	東福岡	帝京
78	平10	1998	横浜フリューゲルス	清水エスパルス	72	国士館大	6位	77	1998	東福岡	帝京
79	平11	1999	名古屋グランパスエイト	サンフレッチェ広島	73	筑波大	優勝	78	1999	市立船橋	鹿児島実
80	平12	2000	鹿島アントラーズ	清水エスパルス	74	筑波大	優勝	79	2000	国見	草津東
81	平13	2001	清水エスパルス	セレッソ大阪	75	国士館大	2位	80	2001	国見	岐阜工
82	平14	2002	京都パープルサンガ	鹿島アントラーズ	76	駒澤大	2位	81	2002	市立船橋	国見
83	平15	2003	ジュビロ磐田	セレッソ大阪	77	駒澤大	2位	82	2003	国見	筑陽学園
84	平16	2004	東京ヴェルディ1969	ジュビロ磐田	78	筑波大	優勝	83	2004	鹿児島実	市立船橋
85	平17	2005	浦和レッズ	清水エスパルス	79	駒澤大	3位/12校	84	2005	野洲	鹿児島実
86	平18	2006	浦和レッズ	ガンバ大阪	80	流通経済大	9位	85	2006	盛岡商業	作陽
87	平19	2007	鹿島アントラーズ	サンフレッチェ広島	81	明治大	10位	86	2007	流通経済大付柏	藤枝東
88	平20	2008	ガンバ大阪	柏レイソル	82	流通経済大	3位	87	2008	広島皆実	鹿児島城西
89	平21	2009	ガンバ大阪	名古屋グランパス	83	流通経済大	9位	88	2009	山梨学院	青森山田
90	平22	2010	鹿島アントラーズ	清水エスパルス	84	明治大	2位	89	2010	滝川第二	久御山
91	平23	2011	FC東京	京都サンガF.C.	85	専修大	4位	90	2011	市立船橋	四日市中央工
92	平24	2012	柏レイソル	ガンバ大阪	86	専修大	6位	91	2012	鵬翔	京都橋
93	平25	2013	横浜F・マリノス	サンフレッチェ広島	87	専修大	6位	92	2013	富山第一	星稜
94	平26	2014	ガンバ大阪	モンテディオ山形	88	専修大	11位→降格	93	2014	星稜	前橋育英
95	平27	2015	ガンバ大阪	浦和レッズ	89	早稲田大	【2部2位・昇格】	94	2015	東福岡	國學院久我山
96	平28	2016	鹿島アントラーズ	川崎フロンターレ	90	明治大	2位	95	2016	青森山田	前橋育英
97	平29	2017	セレッソ大阪	横浜F・マリノス	91	筑波大	1位	96	2017	前橋育英	流通経済大付柏
98	平30	2018			92			97	2018		

補足資料 2. 第 52 回全国高体連研究大会（島根大会 2018 年 1 月 18～19 日）紀要より

活性化委員会からの問題提起

2020 年へ向けて一高体連研究部の新たな使命

（公財）全国高等学校体育連盟研究部 活性化委員会

（前略）

IV. 高体連研究部の「これから」－2020 年を視野に入れて

前述のとおり、これからの部活動、これからの高体連活動を考えるべきときである。高体連はどのような組織であり、研究部はどの部分を担っていくべきかについて共通理解を持つことが大切である。

以下はそのような観点から整理したものである。課題研究のテーマ設定においても有効であろう。

（詳細略）

1. 目指すべき部活動の姿を示す

- 1) 安全で安心な部活動を目指して
- 2) 多様な価値観の受け皿となる部活動を目指して
- 3) 自主性や創造性を育む部活動を目指して
- 4) 学校生活を構成する「学校文化」として

2. スポーツと教育のあるべき姿を示す

- 1) 勝利至上主義の弊害とゆたかなスポーツ文化の享受
- 2) オリンピック教育の可能性と実践事例

3. 学校教育における部活動の位置づけとその解決策を示す

V. 「そもそも」運動部活動とは－明治～大正～昭和～平成

高体連研究部は部活動の教育的意義を認め、積極的に推進しようとする立場にあるが、客観的にみて部活動の位置づけはあいまいであり、そのあいまいさゆえに「ブラック部活」といった言葉に代表される論調もある。

部活動に熱心な先生と無関心な先生のズレは、心情的な部分もあるだろうが、そもそも部活動に対する理解がそれぞれ逆方向にずれていることに起因すると思われる。部活動を過度に礼賛する立場も無下に扱うのも、いずれもずれている。

そもそも部活動はどこでどのように始まり、どのような経緯で現在に至るのだろうか。ここで部活動の歴史的な経緯と現状について大枠を述べる。今後の議論の出発点として共有しておきたい。

1. 大戦前の運動部活動

1) スポーツ導入期（明治～大正時代）

幕末の動乱期を経て明治時代に入り、日本には海外から様々な文化がもたらされた。スポーツもその中の一つである。たとえば横浜や神戸の外国人居留地には YC&AC（横浜カントリーアンドアスレティッククラブ）や KR&AC（神戸レガッタアンドアスレティッククラブ）などのクラブが生まれ、地域住民との交流を通してスポーツが根付いていった。しかしスポーツが全国に広がっていくための起点となったのは高等教育機関の学生たちである。

彼らに近代スポーツを伝えたのは、海外からやって来た教師たちである。ベースボールは、開成学校（いまの東京大学）の英語教師だったホーレス・ウィルソンが 1872 年に伝えたと言われる。この新しいスポーツは大人気で、ハイカラな遊戯として楽しまれたが、のちに第一高等学校野球部（いまの東京

大学教養学部)において、「道」を究める独特の野球信条が加味され、日本的なスポーツ観の原型が形づくられる。いまの東京大学では、ほかにもお抱え外国人教師が積極的に学生にスポーツを紹介した。たとえば F.W.ストレンジは、ボート競技を学生とともに行うとともに、1886 年には日本ではじめての運動部の連合体である「運動会」を組織し、学生のスポーツ活動を奨励した。

野球とともに国民的スポーツとなったサッカーは 1873 年、築地にあった海軍兵学寮で、英国から赴任したダグラス少佐のもとで 33 名の部下がプレーしたのが最初とされるが、本格的な活動が始まったのは東京高等師範学校（いまの筑波大学）においてである。当時の嘉納治五郎校長は 1896 年に「運動会」を設置し、放課後における学生たちのさまざまなスポーツ活動を奨励した。1901 年にはメンバーシップが確立した「校友会」となり、部活動の原型が形づくられる。同校の卒業生は全国各地の師範学校や旧制中学校に赴任し、放課後の部活動が全国に広がっていくのである。

2) 競技会の開催と過熱化する部活動

20 世紀に入り、大学運動部、とりわけ野球の対抗戦は、卒業生や地域社会をも巻き込むビッグイベントとなっていく。早稲田と慶応の対抗戦は、あまりの過熱ぶりから 1906 年から 1925 年まで中止となるほどだった。当時から学校の名誉をかけて試合に臨む部員たちは、学生の本分である学業よりも野球に打ち込んでいたようで、1911 年には東京朝日新聞紙上で「野球害毒論争」が展開された。

5 年制の旧制中学校でも、放課後の部活動は盛んに行われるようになる。この傾向を助長したのも各種競技会である。当時の大学は有望選手の勧誘を兼ねてさかんに中学校の競技会を主催した。また新聞社主催の競技会も開かれるようになり、多くのファンの関心を集めるようになった。1915 年に全国中等学校優勝野球大会を主催したのは大阪朝日新聞社で、大阪毎日新聞社は 1924 年に選抜大会を主催する。同年には甲子園球場ができ、多くの観客を集めるビッグイベントに成長していくのである。大阪毎日新聞社はまた、1918 年に日本フットボール大会も主催。ア式の部は全国高校サッカー選手権大会に、ラ式の部は全国高校ラグビー選手権大会につながり現在に至る。

他種目においても新聞社主催競技会が開催され、大学主催大会とあわせて、戦前の旧制中学の部活動は過熱化する。とくにその傾向は野球において顕著であった。

3) 教育か競技かー野球統制令の影響

「野球害毒論争」は、教育と競技の論理の間で揺れ動く学校運動部をめぐる論争であった。戦前の野球やサッカーの有力校の記録をみると、遠征や合宿の連続で学業どころではなかった様子がわかる。

プロ野球が生まれた 1936 年、プロとアマチュアの関係でも様々な問題が生じ、学生野球のあるべき姿を文部省が規定する事態に陥る。「野球統制令」である。これにより、各学校段階によって競技会の範囲や回数が規定され、戦後の文部次官通達につながっていく。

「野球」統制令ではあったが、他のスポーツにも大きく影響し、大学主催大会や新聞社主催大会は淘汰されていく。

そして徐々に戦時体制に移行する。既存の競技会は明治神宮国民体育大会に再編され、それも昭和 18 (1943) 年度を最後に開かれなくなった。

2. 戦後の部活動

戦争が終わり、部活動は再開した。それは明治期にはじまる部活動の復活であるとともに、新たなはじまりでもあった。戦後の部活動の展開について、中澤篤史著『そろそろ、部活のこれからを話ませんか』（2017、大月書店）より引用しながら概観したい（引用箇所はいずれも同書）。

1) 民主主義と部活ー1945 年、戦後改革の時代

戦後になって教育のあり方を一新しようとさまざまな改革が行われた。ひとことで言うと「自主性」を持った国民を育てることが戦後民主主義教育の使命となり、部活動もこの理念に沿って再興された。

「学校教育は、戦前の軍国主義から戦後の民主主義へと大きく変化した。その流れの中で学校体育は、体操からスポーツへと大きく変化した。教師が一斉に号令をかけて生徒がその通りに体を動かす体操ではなく、生徒が楽しみながら好きなように体を動かすスポーツこそが、これからの民主主義的な教育には大切だと考えられた。そこで、そうしたスポーツを教育としておこなう部活に注目が集まった。部活では、教科の枠を越えて、スポーツを思う存分にできる。スポーツは、自主的・自発的・自治的におこなわれるのだから、まさに民主主義を学ぶ絶好の機会になるはずだ。好きなスポーツを自分から進んでおこなうのだから、教育効果もいっそう上がるだろう。そんなふうに考えられて、スポーツ、そして部活に、＜自主性＞という価値が与えられた。このように戦後教育改革で部活は、民主主義的な意義があると意味づけられた。その結果、部活は多くの生徒に行きわたるように整備されていった」

「しかし、戦後から現在に続く部活は、期待された民主主義的な意義がそのまま実現されたわけではなく、その時々々の社会背景に振り回されながら移り変わっていった。なぜなら社会背景が変わると、部活への期待や果たすべき役割も変わったからだ。しかしそれだけではない。民主主義的な意義が実現できなかったのには、別の理由もあるように思う。それは、民主主義、民主主義といいながら、そこで言われる民主主義とはどういうことかがはっきりと理解されていなかったからだ」。

2) 平等主義と部活動－1964 年、東京オリンピックと部活動

1964 年の東京オリンピックへ向けて、部活は選手養成の重要な場所として注目されるようになった。そして国による部活の規制が緩和されていく。「たとえば中学生の場合、それまでは教育的な配慮から、宿泊を伴う遠征や全国大会などが制限されていたが、それが認められるようになった。競技力を上げるために、どんどん試合をしようじゃないか、日本一の選手を決めてオリンピックに送り込もうじゃないか、という流れができた。日本選手団 355 人のうち、14 人は現役の高校生だった。陸上や水泳の種目で、高校生アスリートはオリンピックに出場した。候補選手の段階では高校生の数はもっと多くて、中学生も含まれていた。東京オリンピックという国家的イベントの流れに巻き込まれながら、部活は競技力を向上させる役割が期待されていった。その結果、部活は、誰もが気軽にスポーツを楽しむ場所というよりも、一部の生徒を一流選手として養成する場所になっていった」

「しかしこのように部活を一部の選手のための場所にしてしまうことは、平等主義的な観点から批判された。（略）東京オリンピックを境にして、部活の役割と意義が、一部の生徒を一流選手に育てようとする選手中心主義から、すべての生徒に平等なスポーツ機会を与えようとする平等主義へ変わっていったのだ。それを象徴する政策が、1969 年、1970 年の学習指導要領で設けられた＜必修クラブ活動＞であった。必修クラブ活動は、教育課程内の特別活動の中に設けられたので、授業として実施され、全生徒が参加することになった。必修クラブ活動を設けることで、すべての生徒にスポーツや文化活動にふれる機会を与えながら、スポーツを普及していくことがめざされた。必修クラブ活動に触発されて、運動部活動への加入者も増えはじめた。」

「しかし、この必修クラブ活動は、学校現場を混乱させた。必修クラブは、これまでの部活と同じなのか違うのか。クラブと言うと＜自主的＞な活動のはずだが、それを＜必修＞にするとはどういうことか。教師たちは、必修クラブ活動に対してそうした疑問を抱いたり、悩んだり、苦労したり、時には反対したりもした。」

3) 管理主義と部活動－1980 年代、校内暴力の時代

「1980 年代の学校では、校内暴力が多発し、生徒の非行問題への対処が迫られた。こうした背景から、部活は非行防止手段として役に立つ、と教師は意味づけはじめた。（略）非行防止手段として部活が意味づけられたことで、学校や教師は、生徒指導上の必要性から、部活への関わりをこれまで以上に大きくしていった。この時期に部活は管理主義的に変わっていった。それまで部活には＜自主性＞という価

値が与えられていたが、皮肉にも、管理主義がその＜自主性＞を利用することで、部活はかつてないほど大規模に拡大していったのだ」

4) その後の部活

「大規模に拡大した部活は、もはや学校や教師のみでささえることは難しくなった。部活は、学校と教師を苦しめる、排除されるべき教育問題として扱われるようになった。こうした中でふたたび、部活を地域へ移行しようという声が大きくなり、＜学校スリム化＞や＜総合型地域スポーツクラブ＞といった言葉が躍りはじめた。もう部活の時代は終わりだ、これからは地域の時代だというわけだ。政策としても、部活の地域移行を視野に入れながら、部活の自由度を高めようと、必修クラブ活動が廃止された。さらに文部省は、＜個性尊重＞や＜特色ある学校づくり＞と部活を絡めながら、色々な部活のあり方が可能になるように、対外試合制限などの規制を撤廃した。そうして各学校は、部活で地域住民や保護者と連携することや、部活そのものを地域へ移行することを求められた。大規模化した部活は教育問題として見なされ、その問題解決が、部活の解体も含めて模索されることになった。」

「しかし、いまでも部活は学校に残り続けている。部活はやはり地域へ移行しなかったし、解体されることもなかった。なぜ部活は残ったのか。そしてどのように続いているのか」

VI. おわりに

中澤氏の著書はこのあと、各種データやフィールドワークで得た情報をもとに「部活動の現実」が描写される。この他にも、研究者やジャーナリストから、部活動のいまを論じる著書や論考が増えている。さらにネットの世界をのぞいてみると、個人的な呟きから組織的なムーブメントに至るまで、さまざまな言説が飛び交っている。高体連研究部に関わる人や組織は、これらの言説を踏まえながらもそれぞれの現場に立脚し、幅広い視野で部活動のあり方を論じていきたい。堂々と取り上げる場がここ（研究大会）にある。

本稿は、部活動の「いま」と「これから」について、課題研究や各都道府県の調査を通して見えることを述べ、さらに活性化委員会としての主張を展開した。これらを参考に、各都道府県研究部や専門部で「高体連の新たな使命」について考えていただければ幸いである。

部活動のあり方を探る動きはいま、学会設立へと向かっている。その設立趣意書を転載し、本稿を終えることにする。

補足資料 3. 日本部活動学会 設立趣意書

日本における部活動は、長年にわたって発展を遂げ、学校教育に根付いています。教育文化の一翼を担っていると言っても過言ではありません。活動に参加することで児童生徒が生きがいを感じ成長・発達した実践などを通して、部活動の良さや価値は認知されています。ただし部活動に関する学術的な研究は、スポーツ科学や教育社会学をはじめとして研究成果が蓄積されている分野もあるものの、実践の隆盛に比べれば文献や論文は多くなく発展途上の状態にあると言えます。長年にわたって継続してきた要因や歴史的経緯を含め、部活動の教育的意義や価値、学校教育の中で果たす機能についてのさらなる研究が求められています。同時に各分野に散在している研究成果を横断し俯瞰する研究も必要です。

近年では部活動のあり方が問われてきており、その存立の意味も含めて問い直しの声が広がっています。例えば児童生徒の負担の問題（家庭での時間や自由時間が少ない等）、顧問教員の過重負担、教員の全員顧問制と児童生徒の強制加入、過酷な練習や体罰、外部指導員との連携や質的向上、部活動指導員（職員）の確保、保護者の理解と協力、大会や練習時の送迎の問題、選手育成か教育かという目的に関わる問題など、多様な問題や課題です。これらを解決する方策を探り、部活動のあり方を考察するためにも、学術的な観点からの知見が必要となっています。

部活動の研究には、その実態に即した多角的な分析が必要です。健康・安全、成長・発達、キャリア、生活など児童生徒の視点、指導方法、働き方改革、労働問題など教員の視点、外部指導者、社会教育との関係など環境整備の視点、法整備や指針、給特法など行政の視点等の多角的な視点からの研究が進展することで、部活動のあり方を総合的に分析・考察・追究し、実践に資する知見を提供することができます。

そのためには教育学、教育心理学、教育社会学、カリキュラム論、教職論、教師教育学、教育史、特別活動、スポーツ科学、グループダイナミクス、法学、医学、ボランティア論、教育行政学、労働経済学など、多様な分野の研究者が集い、学際的な研究を進展させることが不可欠です。部活動の内容に関する分野としては運動関係だけでなく、文化や科学・芸術に関係する学問（文芸、書道、音楽、美術、演劇、映像文化、経済、自然科学、工学、家政、福祉、その他の文化芸能）の研究者や、教科教育系の研究者による知見も期待されます。

また、理論研究だけでなく、実践に携わる小中学校、高等学校等の教職員等による実践研究も重要です。例えば、部活動の学校教育における位置付け、教員や児童生徒の負担軽減を図る仕組み・方策、休養日や大会のあり方、保護者・地域との関係づくりなどについては、ただ一つの正解があるものではありませんが、広く実践的な研究を行い、効果的な施策・取組等について企画、実施し、普及啓発を図っていくことが必要です。さらには研究者・実践者だけでなく、児童生徒の保護者、地域の指導者、教育行政関係者、部活動経験者などが集い、誰もが議論や協議に参加できる共通の場（プラットフォーム）が必要です。

以上のことから、部活動に関する研究者、実践者、関係者が一同に集い、部活動を学術的に分析・考察し、実践に資するための知の蓄積およびそれらを公表し社会に貢献する場が必要であると考え、日本部活動学会（Japanese Association for the Study of Extracurricular Club Activities）JASECA を設立します。

設立発起人一同

2017 年 8 月 6 日 ver.1

2017 年 12 月 14 日 ver.2

2017 年 12 月 27 日設立総会にて承認